

会 議 要 録

会 議 名		平成 29 年度 第 4 回 小平市青少年問題協議会
日 時		平成 29 年 11 月 8 日（水）午後 1 時 30 分～午後 3 時 15 分
場 所		小平市健康センター 4 階 第 2 ・ 3 ・ 4 会議室
出席者 等	委 員	11 名（欠席者 6 名）
	事務局	子ども家庭部長、家庭支援担当課長、生活支援課長、教育施策推進担当課長、地域学習支援課長、子育て支援課子ども・若者支援担当係長
傍 聴 人		1 名
会議 内容	1 開 会 2 議 事 （1）第 2 次小平市青少年育成プランの平成 28 年度推進状況について （2）小平市子ども・若者計画の素案について 3 その他 4 閉 会	
配付 資料	会議次第・席次表 資料 1 小平市子ども・若者計画 素案 資料 2 小平市子ども・若者計画 素案（概要） 資料 3 子ども家庭支援センター平成 28 年度相談件数 第 2 次小平市青少年育成プラン推進状況調査報告書ー平成 28 年度実績ー 平成 29 年版 青少年育成ハンドブック 青少年健全育成講演会「子どもの安全と救急処置」 子どもの権利条約普及推進事業 講演会「子どもたちに寄り添う～いじめ・虐待・少年非行の現場から」 ひらくー未来をひらく、心をひらくー 平成 29 年度版 こだいら子育てガイド	

○ 会議内容等についての意見・質疑応答

1 議事

（1）第 2 次小平市青少年育成プランの平成 28 年度推進状況について

委 員	資料 3 児童虐待相談では、誰からどのような相談があり、どのような対応をしているのか。
委 員	資料 3 養護相談のうち、その他の相談とあるがどのようなものか。
事務局	<p>児童虐待は、身体的、心理的、ネグレクト、性的虐待の 4 種類に分けられる。親の DV（ドメスティックバイオレンス）を面前で見ることは子どもにとって心理的虐待となる。たたかれる、蹴られるといった身体的暴力もある。相談は、家族や祖父母などの親族、また、赤ちゃんの泣き声などで近隣からということもある。</p> <p>子ども家庭支援センターでは、通告や相談が入ればすぐに調査し、その結果、虐待と判断したものはこの相談統計に計上する。保育園、学校など関係機関からの通告も多く、虐待かどうか判断できない場合でも通告するよう、</p>

	<p>子ども家庭支援センターを中心としたネットワークを構築し、意識付けを行っている。</p> <p>その他の相談は、虐待にならない保護者の家出・失踪、離婚などによって養育困難に陥っているものである。</p>
会 長	児童相談所とはどのような連携が図られているのか。
事務局	<p>市では、子ども家庭支援センターを通告・相談の窓口として周知しており、虐待対応を行っている。高度な、専門的な対応が必要な場合は、権限を持っている児童相談所に対応を依頼する。児童相談所とは、3か月に1回、情報の共有など連携を図っており、狭間に落ちるケースがないように取り組んでいる。都内では統一のルールがあり、対応されている。</p>
委 員	<p>子どもの泣き声を聞いた場合に、近隣の複数の人が子ども家庭支援センターや児童相談所、別の機関に通告することもあり、どこが通告を受けても子ども家庭支援センター、児童相談所の双方で状況を確認し、役割分担などを決めていく。四半期ごとに子ども家庭支援センターと児童相談所がそれぞれ関わっているケースを突き合わせ、進行管理を行っている。そのうえで、介入が必要になれば児童相談所が対応し、注意喚起を受け入れる保護者であれば子ども家庭支援センターに見守り等の対応をお願いし、児童相談所は手を引くといったように、ケースによってどちらが主担当として動いていくかが決まる。</p>
委 員	虐待の通告があった場合の調査の内容は。
委 員	<p>家庭訪問することもあるが、呼び出す場合もあり、ケースバイケースである。子どもの状況を確認するのが優先であるため、場合によっては学校などの関係機関の協力を得ることもある。地域住民にとって、子ども家庭支援センターや児童相談所が突然来訪するのは抵抗感があることなので、気を付けながら対応している。</p>
委 員	7ページ、No.37の職場体験の推進について、470事業所のうち、116が市役所関係とのことだが、それ以外の業種、職種はどのようなものがあるのか。
事務局	スーパーマーケットや美容院、銭湯や、農家などいろいろだと聞いている。
委 員	<p>中学校の学校支援コーディネーターをしている。幼稚園や保育園、農家、スーパー、コンビニなど、学校ごとに地域のつながりのあるところで実施している。</p>
委 員	<p>発達障がいの子どものについて、小学校では対応が不十分であったが、中学校に入って通級の先生に出会い、親も子どもも救われたというケースがあった。学校の中で理解が不足していたり、捉え方が異なったりしていることがあるが、教師への研修や子どもに関する情報の引継ぎは行われているのか。</p>
事務局	<p>市では、保育士への研修や、認可の保育園・幼稚園への巡回相談を行っている。巡回相談では、集団生活になじめない、言葉によるコミュニケーションがうまくできない子どもについて、臨床心理士や言語聴覚士が具体的な保育のアドバイスを行っている。小学校へは、こげら就学支援シートで保育園・幼稚園での状況を引き継いでいる。</p>

委 員	保育園を含めグレーゾーンの子どもの多いと感じている。親がグレーのままにしておきたいというようなこともある。
委 員	高校では、保護者からの相談があれば子どもの状況が分かるが、中学校からの情報はなく、分からないことがある。勤務していた学校では年間5回の研修や教員同士の勉強会も行われていた。
会 長	保育園や幼稚園、小学校、中学校の連携はできているが、高校との情報共有は難しい。小・中学校では、特別支援が必要だと感じた場合には、巡回相談や、保護者、校長、特別支援学級の教員で構成する会で、特別な支援が必要かどうか協議している。また、専門外の教員もいるので、教員の中の特別支援に関するコーディネーターを中心に、専門の教員から指導や研修を受けている。子どもによって状況は異なるため、個別支援になる。
委 員	一番認めたくないのは保護者で、先生と接触しないということもあった。
会 長	特別な支援を受けることで悪くなるということではなく、子どもにとって必要であれば、早い段階で支援する必要がある。特別な支援を受けることで低く見られるという社会的な認識があるが、それは誤りである。支援をする、しないを含めてその子にとって一番良い方法をみんなで考えることが重要である。
会 長	その他の事業について、委員からご意見はありませんか。
委 員	青少年リーダー養成講座を受講した人の中には、その経験を活かして積極的に活動している人もいて、リーダーとしての力が身に付いていると思う。
委 員	小学生の時に、青少対祭りなどによく参加し、青少対の活動についてよく見聞きしていた。

(2) 子ども・若者計画素案について

委員	子ども食堂について、市としての今後の方針は。
事務局	市としての方針は固まっていない。様々な取組が行われているが、貧困対策なのか、子どもや親子の居場所、交流を中心としたものかそれぞれに目的が異なっている。文京区では、ふるさと納税や寄付を使ってひとり親や困窮家庭を対象として、食品を配る取組が始まっている。子ども食堂については、市内でも3～4団体がすでに取り組んでいるため、民間の活動にどのように関与するのが望ましいのかも含め、ゼロから検討していく。
委 員	子ども食堂に関わっている。行政が関わると対象者が限られてしまうのではないかという懸念がある。誰でもというスタンスで、お年寄りから家族連れまで受け入れることで、意味合いが薄まることもある。それが狙いのひとつである。対象を絞らないようにしてほしい。子どもの居場所という意味での子ども食堂という捉え方はありがたいと思う。野菜が余っているから使ってという申し出など色々な方が協力していただけるのではないかなと思う。
委 員	歯の健康についての記述がないのはなぜか。貧困世帯の子どもたちは口腔崩壊が起きていることが多いと聞く。歯の健康は、健康な生活や就職活動な

	ど社会活動にも支障があると思う。
事務局	健康は子どもの健全育成のうえで外せないものであるが、健康施策については、健康増進プランや教育振興基本計画など、他計画で進められている。ただし、虐待や貧困の問題とも深く関わるので、貧困対策の共通課題として関係者への情報提供や連携を行っていくことを記述している。
会 長	健康施策関係は、本計画からは抜いているのか。
事務局	健康と教育に関することは、他の個別計画で推進していくというスタンスである。
委 員	歯を磨くことを啓発しても、お金や時間がないとか親の考えによって子どもの歯の健康が保てないということになり得るのではないかと。
事務局	一般的には子どもの医療費助成制度があり、生活保護受給世帯やひとり親家庭にも助成がある。貧困の家庭に対しては、生活全般について総合的・重層的な支援が必要との認識で、貧困対策のところに記述があるように、相談窓口で様々な支援、関係課につなげるように対応していく。
会 長	健康増進プランでは、子どもの貧困に関わる視点があるのか。
事務局	健康増進プランには、貧困の記述はない。貧困対策を打ち出すのは子ども・若者計画が市として初めてとなる。ここを出発点として、計画に掲げた施策が貧困対策であることについて、関係課に意識を持ってもらい進めていくことが重要と考えている。
会 長	子どもの育成に健康は重要であるため、健康施策の所管課においても貧困対策という視点をもって取り組むよう伝えてもらいたい。 ひとり親家庭を対象とする高等学校卒業程度認定試験合格支援事業に費用の助成と記載があるが、給付となるのか。
事務局	全額ではないが、給付となる。
会 長	最近、拡充されていると言っても奨学金など貸付が多く、借金を背負って社会に出ることが問題との指摘があり、気になったところである。
委 員	青少年が参加するイベントや事業などでは開催場所の問題があると思う。小平では、すぐに子どもの数が減るということはないが、学校の統廃合などがあった場合は施設を残し、地域の青少年や地域活動で使える場所としてはほしい。相続で農地が宅地になることが多いが、スポーツ施設など公的な利用ができるようにすると優遇措置があるなど、何か工夫をしていただけると良いと思う。
委 員	子ども・若者計画として色々な事業があり、良いと思う。 地域の中から手を挙げて出てきてくれる人は良いが、本当に困っている家庭は、声を上げることがなかなかできないのが実情である。虐待の通告があり調べた結果、なぜそのような状態になるまで気がつかなかったのかという状況にあることがあった。自ら社会との関係を切ってしまう人こそ困っていることがあり、その人たちをどのように救うか、アウトリーチの方法など取り入れていくことができないのかと思う。

事務局	<p>児童の分野に限らず、高齢者介護の地域包括ケアシステムを全分野に行き渡せるべきとの包括的な相談支援体制の議論が国レベルでは出ているが、市の子育て分野ですぐに取り組める段階ではない。小平市は歴史的に地域で活発に活動している方が多く、その方たちを大事にしながら、連携していきたい。</p>
会 長	<p>ここで、欠席の委員から計画素案への意見をいただいているのでご紹介する。1件目は主に、青少対の活動についての書き込みの希望などのご意見をいただいている。</p> <p>また、別の委員からは、座間市の事件を受けて、若者の自殺願望や SNS による増幅など未熟さを利用され被害に遭ったり、自分が必要とされていないのではないかと考えたりする若者の状況を危惧しているとのことをご意見をいただいている。昨年実施した調査で、若者の将来への不安が高い結果もあり、不安を抱えていても自ら声を上げられない人がいることを踏まえ、今後施策を実施してほしい。</p>
委 員	<p>61 ページ、No.45 の民生委員児童委員への支援について具体的に決まっていることがあるのか。個人情報について、提供がないと動くことができないことがあるため、検討してほしい。</p>
事務局	<p>支援の方向では考えているが、具体的なことについては現段階では決まっていない。</p>
委 員	<p>市内の子ども食堂は、民生委員児童委員や主任児童委員も関わっているが、貧困家庭の子どもだけ対象と言っても来づらいので、色々な人が来られるようにした方が良い。自分の関わっている子ども食堂には、中学生が大勢訪れ、その中に貧困家庭の子どもが交じっているということがあるが、貧困家庭だけのためにとってしまうと難しくなる。ひとり暮らしの高齢者が来ても良く、教員経験のあるお年寄りが子どもに勉強を教えるなども良いと思う。多様な課や機関が連携して、民生委員児童委員などの意見も聞いて進めてほしい。</p>
委 員	<p>子ども・若者の問題は家庭の問題でもあり、補助金の支給など与えるばかりでは、保護者の態度や教育の向上が図られないように思う。そのことを本計画からは読み取れない。</p>
事務局	<p>43 ページの子ども・若者を支える家庭への支援の充実という課題で、子どもに対する親の第一義的な責任について触れている。また、親への支援は充実してきているが、本計画では、子ども自身に働きかける、子どもに直接届く支援をどのようにするかに重点があるということでご理解いただきたい。</p>
委 員	<p>ひとり親には母子家庭だけでなく父子家庭もいる。子育てに自主的に関わる「おやじの会」もありやる気のある若いお父さんもいるので、もっとも小さな単位の家庭を大切に、お父さんを育てる取組があると良いと思う。</p>
会 長	<p>親への支援も良いが、親の自立にもしっかり力を入れてほしい。父親も子育てに積極的に参加すべきという啓発も含めてほしい。計画に盛り込まなくても、実施する中で進めていただければと思う。</p>

委 員	SNS の話に関連して、居場所がないなどの理由で SNS 上で知り合った人のところに会いに行ってしまうケースがあった。周りに話を聞いて分かってあげられる人がいれば防げたと思う。
委 員	SNS は警察でも非常に問題になっている。1 週間家出をして保護したケースでは、ごく普通の家庭の若者であったが、居場所がないという話をしていた。
委 員	身の回りに現実の親、友だち、先生などがいるのに、SNS というバーチャルな世界を現実の世界よりも良いものとして飛びついてしまう、この人が良いと飛んで行ってしまうということがある。
会 長	SNS の問題は、小さい頃からの情報教育の必要性もあると思う。難しい年になった若者たちが抱える問題に、この計画を通して踏み込んでいけると良いと思う。居場所を用意してもそこに来られる子どもたちは良いが、来られない子どもたちにどのように目を向けられるかが課題である。小平の子ども一人残らず健全に育ってほしいと思う。